
無法文太と少女 「支配者」

tonebon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無法文太と少女 「支配者」

【Nコード】

N7260Z

【作者名】

tonebon

【あらすじ】

埼玉県にある「魔宮沼町」。そこは謎で奇っ怪で不思議な出来事が起こる町。そんな町にとある事情である一家が越してきました。とんでもない事件が待ち受けているとも知らずに…。

第1話（前書き）

その昔、武蔵の国に、史上最大にして最深の沼がありました。その沼は、底無しの泥に無数の恨みのこもった遺体をもっていました。

怨念をまとったその沼の名は「魔宮沼」。

しかし、その沼も今では埋め立てられ、町もできました。

人々は希望こめて、その街を「魔宮沼町」と名付けました。

しかし、怨念を消すことはできなかったのです。

怨念はその町の住人に影響をあたえて、数々の異常犯罪者を作りました。

怨念はその町の土地に影響をあたえて、数々の超常現象をおこしました。

いつのまにか……。

「魔宮沼町」は最も奇怪にして、最も危険な町になっていました。

第1話

私の名前は新田秋子。普通の高校一年生です。

この街も今日でさよならです。

住み慣れたお家も、通い慣れた通学路も、友達の春ちゃんや、憧れの鈴木先輩も、今日でさよならです。

明日の朝は別の町の空の下で迎えます。

荷物が整理されて、がらんとした部屋は、わたしの部屋じゃないようです。

いつもは洋服箆笥の後ろに隠されて見えなかった柱。

カーペットの下に隠れてた畳。

いままでありがとう。

「秋子！ そろそろいくわよ」

お母さんの声。もう出発するんだ。

くるっと部屋の出口に向いて、扉を開けた。そうだ、最期に……

「さよなら！ わたしの部屋！」

扉の外からもう一度、部屋を見て、深く頭を下げて。

荷物は先に緑猫武蔵引越センターの人に送ってもらってる。わたしの荷物も、

今着てる、白いワンピースを除いてみ〜んないっしょ。

ぬいぐるみのクマゴロもいっしょ。

わたし達……お父さん、お母さん、小学5年の弟の家族は、みんな揃って

電車で行きます。

新しい町へ。新しい家へ。

東京駅に出たら、もう19時を10分くらい過ぎていました。さすが休日。電車も

空いています。ここから「中武魔宮沼線」に乗り換えます。

銀の車体にオレンジのラインが入った車両の連なりが、静かにホ

ームに

入って来ます。さすが始発駅。余裕で座れました。

「さ、駅についたら起してやるから、少し寝てなさい」

お母さんの優しい声。実は少し疲れてます。あら、伸二ったらもう、いびきかいて。

じゃ、わたしも……。

気がつくと、わたしは暗闇に立っていました。ふと、目の前に、懐かしい人影が。

あの、すこし曲がった腰に、優しい顔は……

「おばあちゃん！」

去年、亡くなったおばあちゃんだ。とても優しくて、大好きだったおばあちゃん。

わたしは、思わず抱きつきました。涙が出てるかもしれない。でもいいや。頭に優しい手の感触。懐かしい温もり。

「秋子や」

懐かしい声で呼ばれて、うれしくて、急いでおばあちゃんの顔を見たら、

「おばあちゃん、なんで、そんなに悲しそうな顔をしているの？」

笑顔だったはずの顔が、悲しそうな顔だった。なんで？

「これから行く町はね、とても、とても恐ろしい町なんだよ。わたしの力じゃ、もう、

秋子を守ってやれないのさ。心配でしょうがないよ」

恐ろしい町？　これから行く町が？　あれ？　おばあちゃんの姿が薄くなってる。

「ほら、近くなるにつれて、おお、恐ろしい。なんて怨気なんだい

？ だめだよ、もう限界。いいかい、秋子！ 向こうについたら無法文太っていう…」

「おばあちゃん！」

おばあちゃんがない。あるのは、電車の椅子と家族。

「夢……？」

体中、汗だらけ。横で寝ていた伸二も、はあはあ言っ、飛び起きたみたい。

「怖い夢を見たのかい？」

心配そうにお父さんがわたし達を見つめてる。あれ、おかしいな。お父さん、なんだか、悲しそう。

20時25分。魔宮沼町駅につきました。

新天地への第一歩を踏んだ時、背中に冷たい氷でも入れられたみたいに、

寒気が走りました。

空気がひどく冷たい。

「極楽口」と書かれた改札を出た時、お父さんが

「みんなすまん……」

と言ったような気がしましたが、それがどんな意味を持つのかは、まだわかりませんでした。

朝が来た。新しい家は和風なムードで一発でお気に入り。

2階の6畳をわたしの部屋にしてもらって、もう最高。こんな広い部屋が、自分の部屋なんて夢みたい。

窓を開けて、新しい町の空気を吸う。おいしい！ 都会の空気と全然違う。

住宅街なのに、隣の家との間は充分すぎるほど開いている所もいい。

深い緑色の山が、三つほど風景にあるのも、自然とのバランスがとれていて最高！

寝巻を脱いで、新しい制服を着ると、くるっと1回転。スカートがひるがえる。

紺のブレザー。胸に大きな、赤いリボン。いいなあ、これ。これからの学生生活に、

すごく期待できそう。

「いつてきまゝす！」

元氣よく言って、道路に出た。新しい黒皮靴が、気持ちよく道路の感触を

伝えてくる。ああ、なんだかスキップしたい気分！ 最高の気分。

少し高いフェンスの向こうに見えてきた。

あれが、新しく通う「魔宮沼高校」か。白い鉄筋5階建てで、大きいアナログ時計

がシンボルみたいな、すてきな学校。校庭も広いし、プールもある。

体育館もあるじゃない。

少し離れた建物は食堂かしら。男女生徒が入っていく、あれが校門ね。

わたしが校門へ行こうとした時、後ろに人の気配がした。振り返る瞬間、おなかに痛みを感じて気が遠くなっていく。誰？ 男性の声が……不気味な

……声が……。

「ようし、いい物が手に入ったぞ」

第1話（後書き）

昔、某所で書いた短編連載SSです。

菊地秀行好きなので、設定などに影響がでています。

リハビリと精神修行のため、晒します。

ぐわーーー

第2話

頭が重い。ボーツとしてる。汗をかいているわ。

あ：あれ？ 手が動かない。あ、足も？

いやだ！ わたし、手足を縛られてる！

誰？ わたしをこんな格好で寝かせて、何をする気？

やだ！ 人の気配がする！ わたしを見ている！ 恐くて目を開けられない！

「なーんだあ？ どーしたんだおめえ」

はあ？ な、なんてぬけた声？ 寝惚けてるような声。

男の声らしいけど…。

わたしは勇気を振り絞って、目を開けた。

とたん：ここは天国かしら？ なんてきれいな顔をした：

微笑んだ天使がわたしを見下ろしている…。

「手足なんか縛って：マゾなんか？ おめえ」

はあ？ なに？

「ちよ、ちよっとまってよ！」

なによ、この男一顔がきれいだからって一縛ったのはこいつじゃないの？

「ふざけないで！ さっさとほいてよお、変態！」

男の口が、への字に曲った。

「礼儀をしらん女だなあ」

男はブツブツ言いながら、縄をほどいた。手足が自由になったら、チャンス！ わたしだって：

「なめないでよ！ これでもわたし、柔道部なんだからあ！」

そう、前の学校では柔道部に入ってたのだ。

この、瞬時に立ち上がって構える腕のよさ。

へへ、どうだ、変態めって、あれ？ いない。さっきの男が。

「おい、礼儀しらず。下だ、下」

声の下から聴こえた：あら、まあ。てっきり背の高い筋肉変態だ
と思ってたら。

「か、かわいい」

つい、口に出してしまった。

わたしだって、背が高いほうじゃない。でも、この男は、わたしの
：頭二つ下：

140センチあるかないかという…。

「ば、ばかにするんじゃないねえ！ 礼儀しらず、いや、恩しらず！」
きれいな顔をした背の低い変態は、部屋の扉からダッシュで消え
た。

泣いていたかもしれない。：罪悪感がちょっとわいたけど：いいき
みだわ。

すでに4時間目が終って、お昼の時間も終わりにかけていた。
まったく、転校早々にこんな目にあうなんて。しかも大遅刻なん
て。

とりあえず、職員室に行く事にした。

本当なら、登校して一番に行く所だったのに、なんで、あんな部
屋一理科室だった

のかな？ 一に行かなきゃならないのよ。

あのチビスケ変態が全たいけないんだわ。

制服着てたから生徒よね。先生に言いつけてやる。

「職員室」と書かれた扉をガラッと開けた。

わたしは、呆然としていた。

先生が一ほんとに先生？ 一いる。いるけど、あれは何？

机の上に祭壇を作って護摩を焚いて経を唱えてるメガネのガリガリ

先生、

真剣で汗水垂らして百本打ちやってるスマートな女教師、試験官を片手に怪しげな薬の調合しているバーコード頭の中年教師、異常に膨れ上がった右腕の筋肉で1トンと書かれた鉄アレイを上げるジャージの

体育教師。

見てはいけない秘密の儀式のような雰囲気。

わたしの頭にあった先生のイメージがガラガラと崩れていく。

その時、いきなり肩を叩かれた。振り向くと、そこには一長い白髪を垂らした、

幽霊が立っていた。怪談映画に出てきそうな白衣の男幽霊！

「きゃああ！」

わたしは、悲鳴を上げた。先生達の視線が、じろりとわたしに集まる。

「み、見てませんっ！ わたしは何も見ません！」

「何を言っとる、おまえ、新田秋子だろ」

肩を叩いた幽霊が、ぴったりの声で言った。いやだ、この幽霊、わたしの名前を知ってる！ 怖い！ 助けて！

「しっかりせんかい、担任の幽霊だ」

とたんに、職員室が大爆笑になった。

恐怖から、いきなり笑いになって、わたしは混乱した。

信じられない。この人達が先生？ この、どう見ても幽霊にしか見えない人が？

朝から変な事が多すぎるわ。夢見てるのかしら、とびきり怖い悪夢を。

「今までどこで、さぼってたあ」

さぼってた？ え？ 違うわ！ わたしは——やっぱり先生だわ、この幽霊。

「よく、わかりませんが、理科室みたいな教室で縛られてました。さぼりじゃありません！」

「ほお」

え？ あ、しまった。

「ち、違うわ！ 変な事じゃないです。登校中に……」

そこまで言って、幽霊教師の表情が違うのに気がついた。いやらしい想像をした顔

じゃない。

「理科室か。あそこは一年前から消えちゃってなあ」

「は？」

「いや、後で話してやる。とにかく、教室へ行くぞお」

この先生は、わたしが縛られていた事には、まったく興味ないみたい。

で、理科室が消えた？ 一年前から？ はあ。

ま、とにかく、やっと教室に入れるのね。

階段を上がって：あれ？ 四階分くらいは上がった気がしたんだ

けど、廊下に3

の字。おかしいな。

「あれ先生、ここ、四階じゃあ？」

「よくあることだ。ここは三階」

はあ。まあ、いいわ。

おお、見えた。一年四組の教室。

友達いっぱい、できたらいいな。素敵な男の子いるかな？ わく

わくするなあ。

木製の扉の向こうでは、クラスメイトになる生徒達のワイワイ声。

どんな話してるのかな？

「あぶないぞお！」

扉の向こうから聞こえた。へ？

「新田、あぶないぞ。どけ」

幽鬼先生が言った。へ？？

扉がわたしに飛んできた。へ？？？

「いたあ！」

直撃。いたい！ 衝撃で廊下に尻もちついた。扉がわたしの上に
乗ってくる。

「ぐわおお！」

声がした。一瞬。でも、心が瞬時に凍りつくような声。いえ、鳴
き声？ お尻の傷

みをこらえて声の方を見たら、いた。いたけど、なに？ 犬、いえ
狼？ 茶色の毛で

包まれた四本足の獣がいる。目があった。黒い目がわたしを見てい
る。ぱっくり裂け

た大きな口から、鋭い歯の行列が見える。動けない。声も出せない。
これが、金縛り
なの？

「まちやがれ、犬狼！」

その声が、わたしを金縛りから解き、狼を怯ませた。

狼は、一声鳴くと、廊下を失踪していった。

「こらあゝ犬狼！ 廊下は走っちゃいかん」

幽鬼先生の声。狼がこけた。

呆然。また、呆然。廊下に座り込んだまま呆然。左肩には、外れ
て倒れてきた扉が
乗ったまま。

「無法、また喧嘩か？」

「幽鬼先生！ 犬狼の奴、俺を”ちっけー”って言ったんですよ」
「またか」

何事も無かったように続けられる、先生と生徒の会話。なんなの
よ、この学校は。

やっと、教室に来たと思ったら、変な狼がでてくるし。もう、いや！
悲しくなってきた。目頭が熱くなってくる。いいもん、泣いてや
る。

その時、手が出てきた。わたしの目の前に。

「わるいなあ、確認する暇がなかったんでなあ」
寝惚けたような声と共に。

その声は、不思議に、わたしの悲しみを解いてくれた。ん？
まって。どこかで聞いたような声だわ。

足を見る。スラリとした足が、グレーのスラックスに包まれている。

あれ、もう、身体が見えた。あまり背の高い人じゃない。グレーのブレザーのボタンは止められていない。その下には白いワイシャツ。

黒い長髪に包まれた、奇麗な、それでいて、凜々しい男らしさを感じさせる顔。太

い眉毛がそれを引き立てている。

…あれ？

「あーっ、チビスケ変態！」

まちがいない、あの、背の低い変態！

「なっ…なにいーっ！ 恩知らずのくせに、チチチチチチチ、チビスケだとお！」

「な、なによっ！ せ、先生、こいつ、こいつがわたしを……」
ん、先生？ いない。

「さっさと入れ〜授業だ」

え。いつのまにか、教壇に立っている。そして、生徒の爆笑。

「えーい、うるさいっ。恩知らずっ、必ず決着つけるぞお」

爆笑をかきわけ、チビスケ変態は席についた。あんな後ろで黒板みえるのかしら。

「よし、新田〜こい」

先生に呼ばれて、教壇の横に立った。おお、同級生のみんな！とチビスケ。

やっぱり、初めが肝心。緊張するなあ。

「転校してきた新田秋子だ〜。なんと、理科室に目をつけられたぞ

」

「よろしく願います！ …え？」

同級生の目が変わった。それは、恐怖であり、驚きであり、哀れみでもある。いつ

たいどうしたの？ 理科室に目をつけられるってなに？

さ、最悪な初め。どうして？ わたしがなにかしたの？

席を指定されて、腰掛けた後も、みんなわたしをちらちら見てる。孤独…わたし、いきなり村八分にされちゃた。なんで…。

悲しくなって、どうしようもなく悲しくなって、うつむいた時、

「おい、恩知らず。腹でも減ったか？」

ん、あれ？ チ、チビスケ変態の隣の席だったんだ。

「う、うるさいわね。ほっというてよ…変態」

そうだわ。こいつがいけないのよ。すべてこいつが…。

「おりゃあ、無法文太っていう。授業終わったらつきあえ」

な、なによ…

「なによ、まだわたしに悪さする気！？」

「いや。俺がチビじゃねーって所を見せてやるのよ」

そして――チャイムが鳴り、休み時間になった。みんなは、あいかわらず、変な視

線で、わたしを見ている。いや、一人違った。

「さ、来てもらおうか」

第2話（後書き）

昔、某所で書いた短編連載SSです。

菊地秀行大好きなので、設定などに影響がでています。

リハビリと精神修行のため、晒します。

ぐわーーー

第3話

チビスケ変態のくせして綺麗な顔してる変な奴、無法って言ったかしら。

転校初日を台無しにした張本人。ゆるせないわ。

「どこに連れてく気よ」

「…とりあえず体育館裏、だな」

どき。体育館裏ですって？　なによこの変態、わたしとケンカでもする気？

あつたまにくる。チビのくせに。制服だろーが、スカートだろーが、もういいわ。

そっちがその気なら柔道部の腕前を味わってもらうわ。

変態の後について誘われるまま、校庭に出て青い屋根の体育館の裏へ。

体育館の壁と高いコンクリートの壁に挟まれて薄暗い。

ん？　おかしいわ。陰に、体育館の陰に入った途端、なんだか寒い。季節が一気に

冬に…いえ、南極にでもなったかのような…もう花見も終わる季節なのに。

「ぶわっくしょんっ」

思わず、くしゃみ。それをまっていたかのように、チビスケが振り向いた。

「寒いか」

「寒いわよ…なんか変よ、ここ。いえ、この学校、みんな変だわっ」

「…ま、いいや」

よくないわよ。

「一つ、いっとく。俺はチビじゃない」

変態はわたしを見上げながら、右手ひとさし指を立てた。

こうして見おろすと：あらためてわかる。こいつ、小学生料金でバスに乗れるわ。

変態でなければ美少年ってところね。眉毛は太めだけど。

「わたしをあんな目にあわせておいて…」

ん、んん？ 変態の顔がない。あるのはスラックスの黒ベルト。

「ほれ、どうだ？ 俺はチビか？」

ん、んん？？ 声が頭の方から：んんんんんんんんん？？
？？

チビスケがわたしを見おろしている：お、おっきくなった？？

小学生が：ビックサイズの高校生になった……。

な、なに？ なにがおきたの？ こいつ、なに？ 怪物？ 妖怪？
？？

声がでない。足の感覚がなくなって、尻餅ついた。

怪物は腰に手を当ててわたしを見下ろしている。

「：これでチビスケじゃねーって認めるな？ ほれ」

手がおりにきた。指も手のひらも、一応、人間だ。

「しょーがねーな！ 腰でも抜かしたか？」

わたしは腕をつかまれ、立たせられた。あれ：

「これから、人を見てくれだけでチビスケなんて言うなよなー」

声は下から：もどってる。小学生に。チビスケに。

「後は理科室の件だな！ あれは助けてやったんだぞ、恩知らずめ」
さっきは、たしかにおっきかった。チビじゃなかった。

「まったく、たのまれなきゃ、誰があんなところにちよっかい出す
かっての」

見間違いないじゃない。こいつ、背の高さが変わったんだ。

「あんた…何者なの？」

その時、チャイムが鳴った。六時間目がはじまる！
とりあえず、わたし達は教室に走った。

「俺は無法。無法文太って覚えておきな」
走りながら…無法…くんは言った。

無法文太…。

チビスケじゃないかもしれないけど、怪物で変態なんだってのは
わかったわ。

すでに授業が始まっていた。六時間目は…数学だった。
わたしは数学が苦手だ。この変な学校の数学も普通と変わらな
った。残念。

無法くんのおかげですっかり忘れちゃったけど、理科室ってなん
だろ？

理科室は、理科の授業で、実験なんかをする教室です。

普通はそう。でも、この学校では違うみたい。

幽鬼先生が言っていた。一年前から消えちゃった？ 理科室が？
目をつけられる？ 理科室に？

わたしはそこで縛られていた…無法くんに。
なにがなんだか、さっぱりわかめラーメン。

「では、ここを新田、答えてみなさい」
やっぱりうまいぞソース焼そばって、は？

「新田、この問題の答えだ」

さ、さされた！！ さされちゃった！！ 転校初日だったのにさ
された！

問題は黒板に…なにも書いてない！！ 教科書？ 何ページのど
こ？

なんでわたしをさすのよ、このペヤング先生！！

顔が真四角で、白い、まるでコックさんのような服を着てるから
ペヤング先生って

決めたのだ。さっき。おかげでカップラーメンの想像したじゃない

の！

あゝゝゝこんな目にあうのも、あんたせいよ！ 無法くんって、あゝこいつ、

寝てるゝゝしんじらんない――――――――っ！！

「どうした、新田？」

しかたない、ここは正直に…まずは立ってから…

「すいません、わかりません…ん？」

その時、教室のドアがノックされた。

ガラッと扉があくと、そこには白衣を着た男性がいた。

腰までかるほどの黒髪、スラッとして整ったスタイル、キリリとした…そう、

美形としか言い様のない顔、切れ長の目。黒ぶち眼鏡がちょっとマヌケだけど。

「授業中、失礼します」

うわ、なんだろう。こんな人、いるんだ。先生？ わ、わたしを見た。

「やはり、ここにいたか。貴重な実験材料にして、この世の支配者よ」

は？

第4話

「まて、理科室」

は？ ペヤング先生、なんですって？

「角田先生、これは貴重なチャンスなのです。邪魔をしないでいただきます」

「そうはいかん」

いつのまにか、黒板の前でペヤング先生と白衣の男性が向き合っている。

今、ペヤング先生、理科室って言ったような…。

「理科室だ！ 理科室！ 理科室よ！」

え？ クラスメイト達が叫んだ。理科室？ あの男性が？？

「新田さん、無法くんのそばから離れちゃダメよ！」

はあ、なにが、いったいなにが起きたの？

クラスみんなが立ち上がり、席をどかして白衣の男性の回りを囲む。

席についてるのは、わたしと…寝ている無法くんだけ。

「これはこれは。ずいぶんクラスメイト思いな事でー」

「うるせー人さらいめ！」

「そーよそーよ！」

「新田さんを渡しはしないわ！」

「あの…みんな、どうしたの？」

わたしは状況を把握できず、思わず口にしてしまった。

みんながわたしを見た。

「新田さん、あなた理科室に目をつけられたのよ？」

そう、理科室に目をつけられた。それで、わたしはみんなに村八分にされた。

ちがうの？

「あー、お前たち。生徒にまかせるわけにはいかん。席にもどりなさい」

ペヤング先生がみんなに言った。

「そんな、僕たちは仲間を守りたい」

「まずは教師の仕事、という事だ。今は無法がダウンしてるしな」
みんなの視線が、眠る無法くんへ。

「そう、生徒諸君には危害は加えられぬよ。理科室の名にかけて。さがりたまえ」

白衣の男性が言う。理科室の名にかけて？

みんながしぶしぶとクラス後方へ、わたしの方へ下がった。

黒板の前で再び、ペヤング先生と白衣の…理科室…？ が対峙した。

「どうしても邪魔をされるか？」

「新田には問題を解いてもらわねばならない」

教室が緊張した空気に満ちた。でも、わたしはどうしたらいいの？
なにがなんだか、ほんとにわけわからないよ！

わたしの席をかこむクラスメイト、みんなに聞いてみよう。

「あの…いったい、どうしたの？」

わたし、理科室に目をつけられて、みんなに きらわれたんじゃないの？」

セミロングの黒髪がかわいい女子生徒が振り向いた。

「…ごめんね、さっきは理科室って聞いたから…ちよっと気負っちゃったのよ」

「僕も。ごめん。でも、君はもうこのクラスの一員なんだから」

「そうそう、俺たちが守るのは当然さ」

まだ、名前も知らないみんな。わたしを守ってくれる？

「あ…ありがとう…でも、理科室って、あの人？ なんなの？」

「もらったぞ、理科室！」

その時、声が。ペヤング先生のだ。みんなも黒板の方を向いた。ぎよ。ペヤング先生の髪の毛…いえ、服の間からも毛が伸びて理科室に走った。

毛が理科室の白衣を取り巻いてゆく。

「おお、角田先生のイカスミ・スパゲッティ！」

おお、イカスミ…麺攻撃？

わかめラーメン攻撃ねって…なんなのあれ？

「私の毛はNASAの糸より丈夫なのは知ってるだろう、理科室」
「…この世界の…ですがね」

ビィンと音。なに？

「なっ？」

理科室の体に巻き付いていた髪がハラハラと落ちている。

「別の世界のNASAが開発したはさみ。よく切れます」

理科室の両手に…ギリリと長めの刃のついた…そう、通信販売でよく見るような高枝ばさみが。

「お前、いつのまにっ」

「わが、”さまよえる理科室”をなめないでいただきたいですな。さらに」

理科室の白衣の裾からなにかが。

瞬間、はげしい光といっしょに教壇が爆発。強い風。すごい音。

なに？ なにが起きたの？ 煙でよく見えない。耳がよく聞こえない。

教室が煙でいっぱいになった。

「角田せんせいっ！ せんせい！ 角せんっ！」

みんなが叫んでる。いったいどうなったっていうの？
ん、耳が治った。

煙も晴れていく…の中に人影が。

白い、白い影。長い黒髪にも顔にもなにもなっていない。黒斑眼鏡の奥から切れ長の目がわたしを見ている。

「角田先生は滅びた」

ほ、滅びた？ し、死んだって…事？ ペヤング先生が？

「り、理科室、角せんに、なにしやがったんだ！」

みんながわたしの前に立つ。理科室に立ち向かっている。

「個人用小型誘導ミサイル。局所的にだが1000度の熱を放射する」

ミ、ミサイル？

「このような物が、コンビニで105円で売っている世界もあってね」

なに？ なに言ってるの？

「さあ、生徒諸君。彼女を渡してもらえるかな？」

白衣が近づいてくる。みんながかまえる。

角田先生から毛がでて、爆発して、理科室がミサイルで、いま近づいてくる。

「…いいかげんにしてよっ！！」

みんながわたしを見た。理科室も。もうやだよ！

「もう、やめてよ！ こんな冗談なんでしょ？ それとも夢？ 悪夢？」

もうやだよ！ こんなありえないし、普通じゃないよ！ 夢だよ！

「…現実だ」

横から声。ねぼけたような、でも、不思議とはつきり聞こえる声。

「夢でもねえし、冗談でもねえ」

さっきまで寝ていた…無法…くん。

「今まで、どんな世界で生きてきたか知らねえが…目の前をみてみな」

理科室がゆつくりと近づいてくる。

「おお、無法！ 復活したか？」

「新田さん、だいじよぶ！ あたしが守るから！」

「理科室、俺の技、うけてみるかあ！」

でも、その前に立ちふさがるみんな。クラスメイト達。
どうして？

「みなさん、邪魔はしなくても構いたいのですがね」

「うるせ！ くらえ！」

男子生徒が走った。飛び蹴り：でも、理科室の前で跳ね返った。
「ていっ！」

女子生徒が投げた。シャーペン？ でも、理科室の前で曲がり、
それで床へ。

みんなが理科室に向かっていく。

どうして？ どうして、転校初日のわたしを：わたしのために？

「わ、わたしのために？ みんなっ、なんで？」

「理由：？ 簡単じゃねえか」

無法くん：いつのまにか、わたしのそばに立っている。

「お前がクラスメイトだからだよ」

あ：

「：それだけ？」

「ああ、みんなはな。俺は頼まれたんだけどよ」
頼まれた？

「最後は：無法くん、あなたですか？」

みんなが：みんなが床に倒れてる！

「ああ、邪魔させてもらうよ」

無法くんが：今度は無法くんが、理科室の前に：ん？ すこし、
ふらついているような？

「君ですね？ 今朝、彼女をさらっていったのは」

「ああ、やぼ用でね」

長身の理科室の前に立つと、やっぱり小さく見える。

「…でも、今の君は万全ではない…ですね？」

「ああ、ちょっと”力”を使っちまってね」

力…使った？

「ミスですね。無法文太ともあろう者が」

裾が光った？ ミサイル！？

「しまった！」

また爆発！ 無法くんっ！？

あ…

第5話

あらすじ 1／4

わたしの名前は新田秋子。

お父さんの仕事の都合で、この「魔宮町」に来ました。

転校初日で、いざ！　と思ったら、チビで変態の無法文太くんに縛られるわ、

変な先生達にびっくりさせられるわ――で、最悪なスタートになっちゃいました。

それだけじゃなく、理科室に目をつけられたって、クラスメイトのみんなに

変な目で見られるし…。

負けるもんか！　がんばるもんね！　って思っていたら…

白衣を着た長身の男性が教室に来て、

「ここにいたか。貴重な実験材料にして、この世の支配者よ」
ですって。

え、わたしの事なの！？　理科室って、この人の事なの！？

目的は…わたしをさろう事！？

でも、先生が、変な目で見られていた――と思っていたクラスメイト達が、

わたしを守ろうとしてくれた！

でも、でも、理科室は、変な力とミサイルを使って…みんな倒されてしまった！

チビで変態の無法くんも立ち向かったけど、ミサイルが！

わたし、どうなっちゃうの！！！！？？

――――――――――

「秋子や」

え、おばあちゃん？

いつのまにか、おばあちゃんがいる。

白髪で、顔にはしわがいっぱい。その顔がニツコリ。

いつも笑顔の優しくて大好きだったおばあちゃん。

おばあちゃんの笑顔を見ていると思い出す。

わたしは小さいころからドジで、失敗ばかりしていた。

周りに迷惑ばかりかけていたから、自然と自分に籠るようになってしまった。

小学校の演劇コンクールでお話の役だった時、私が1ページ読み飛ばしてしまい、

劇を台無しにしてしまった。

クラスのみんなに村八分にされて、わたしは独りになってしまった。

学校の帰り道、クラスの男子に言われたっけ。

「この、疫病神！」

劇の主役で、しかも、ひそかに想っていた男の子だった。

もう、落ち込んで。落ち込んで落ち込んで。

「わたしは不幸の星の元に生まれたんだわ」

そう思ったら、もう涙がとまらなくなっちゃって。

泣きながら家につくと、おばあちゃんの笑顔。

「秋子や、お前には、いつもおばあちゃんがついてるからね。安心おし」

この笑顔に、おばあちゃんに、わたしは救われた。

柔道もはじめたのも、クラスや、みんなの世界に飛び出していったのも、みんな

おばあちゃんのおかげだった。

だから、去年、亡くなった時はショックだった。

もう、一週間くらい泣いたっけ。

その、おばあちゃんがいる。

そういえば、昨日、夢で会ったっけ。この町にくる電車の中で見た夢で。

「秋子や、お前には、いつもおばあちゃんがついているからね」

「おばあちゃん！」

ん、天井。白いモルタルの天井。

「気がつきましたか？」

ん、誰？ ん、わたし、寝てる。ん、足が動かない！ 足首を縛られてる！

ん、胸が苦しい！ ああっ、わたし、縛られてる！ ロープで！！
「すこし、手間取りましたが、あなたにはそれだけの価値があります」

ん？ 白衣に、腰までのびた艶やかな黒髪、黒ぶち眼鏡。

「理科室！」

「いかにも」

あ、そうか！ すべて、すべて解った。

朝、わたしを縛った変態は…無法くんじゃなくって…

「あ、あんただったのね！ 変態はっ！！」

「わたしの趣味はいたってノーマルのつもりですが」

わたし、白い実験台——ガス栓や水道がついてる——六人掛けの長机に寝てる。

「な、なによ！ わ、わたしを解剖でもするつもりなのお！？」

黒ぶち眼鏡がわたしを見た。

「それはそれで、興味がありますが」

「な、なによっ！？」

理科室が、いきなり「礼」をした。

「わが」さまよえる理科室」へようこそ。歓迎しますぞ。支配者様は！？」

「なに言ってるのよ！ あんた、なんなの！？ 支配者ってなによ

っ！」

そうだ、そういえば！

「人殺し！ ペヤング先生を殺したわね！ そうだ、クラスのみんなはっ！？」

チビズケ変態って言っちゃたけど…ゴメンっ！

「無法くんは！？」

は、そういえば、ミサイルで…

「あ、あんた！ もしかして、無法くんまで殺したの？ ペヤング先生みたいに！！」

は、理科室が呆然としている。なによっ！

「は、ペヤング先生、ですか？ これは傑作ですね」

むっかゝゝゝ！！ うあゝゝ、なんで、動けないのよ！！

「御安心ください。角…ペヤング先生は…いえ、この学校の先生が、あれくらいで

死ぬものですか。滅びはしましたが、死んではいないでしょう」
は？

「クラスの皆さんも、気を失っていましたが…無事ですよ」

あ、ああ。よかった。あ、でも…

「無法くんは…そこにいますよ」

「え？」

理科室が指さした先には…わたしの足元にある水道の蛇口がある。
銀色のステンレスに…鉄の鎖…ペンダント？ 赤い…血みたいに
赤いルビー

が金色の飾りにはめ込まれたペンダントがある。

「ど、どこにいるってのよ！」

「そのペンダントですよ」

は！？

「な、なんでよ！」

「彼も非常に興味深い。今まで訪れた世界にも、彼のような存在は

なかったのです」

「だ、だからなんで、無法くんがペンダントなのよ！」
理科室がわたしを見た。え？　なんだか…すこし悲しげな。

「ペヤング先生は死んではいないでしょう。ですが、無法くんは死んでいます」

ん、え？　ええっ！？

「いや、かわらず、死んでいるまま…と、いふべきでしょうか」
む、無法くんが…死んでいる…まま？

「無法くんは、小学2年生の時に、あの暴走戦車通り魔事件——と言ってもご存じあ

りませんか——命を失ったのです。

彼の祖父は心霊研究で名を馳せた無法教授でしてね。

事件への、怒りと、悲しみと、復讐をこめて、あのペンダントに魂を移したのです。

それだけではありません。

ペンダントを核に霊物質を集めて、現世に実体化できるようにしたのです。

人間は、様々な能力をもっています。

足の速い人、力のつよい人、頭のいい人。それらの能力を秘めた魂…霊物質の

集合体…それが無法文太なのです。

なんとという素晴らしい存在でしょうか！　なんとという超常的な存在でしょうか！

彼は霊体サイボーグともいえる存在なのです！

古代からの霊魂や怨霊うずまく、この魔宮町においては、彼は又シとも言える

存在なのですよ！」

え、な、なに？　なんですって？

「な、なに？　そ、そんな」

霊体サイボーグ？　ペンダントに無法くんの魂？

「じゃ、なんで？　なんで、今はペンダントなの？　無法くんの姿じゃないの？」

そ、そんな。無法くんを…わたし、散々…

「普段の彼を見ていると、小学2年生当時の姿がもっとも安定しているようでした」

チビだの、かわいいだの、変態だのって…

「彼はチビと言われると、どうも後先考えずに行動するようですね」

チビって、チビって言った！　わたし！

「身長を変えるほど、霊物質をつかえば、基本能力に衰えがでるでしょうに」

そ、それで、そんな状態で…無法くんは…！！

「そんな状態でミサイルを受ければ、ああもなりますね。」

わたしを、わたしを守ってくれたんだ…！！

「ああああああ！！　無法くんっ！！　ごめんなさい…！！」

目頭があつい。涙がこみあげてくる！

なさない！　自分がなさない！！　ごめんなさい…！！

「まあ、彼がこうなったのは、あなたの能力の影響でしょうけれども。支配者のごとき能力のね」

！！

「なによ！　なんなのよ！　わたしの能力って！？」

「あなたは不幸の星の元に生まれたのです」

第6話

は？　なんですって！？

「あなたは不幸の宿命を背負っています」

わたしが…不幸？　不幸がわたしの能力だったの？

たしかに、わたしの人生は不幸の連続だった。

一時は、不幸の星の元に生まれた悲劇のヒロインだと思っていた。でも、それは、おばあちゃんのおかげで乗り越えた過去。

今は…前向きに生きる努力を身につけている。

わたしは不幸なんかじゃない。ただ…最近、運が悪いような気がするけど。

それが能力だったの？

「は！　不幸なのが能力ってなによ？　なんで、それが支配者だったの？」

支配者ってのは、全てを思いのままにする事…かな？　だったら、

不幸な人は

むしろ、支配される側じゃないの？

理科室が後ろを向いた。長い黒髪がひるがえる。

「生年月日、性別、血液型、人相、手相、歩んできた人生、その他
もろもろ…」

「占い？」

「あなたが、あなたである要素ですよ。たとえば、首筋にほくろが

ありますね」

なっ…

「どこ見てんのよ！」

「あなたのほくろです」

…む。

「そのほくろがなければ、あなたではなくなります。

あなたの容姿は見てわかりますが、人生の歩みは調べなければわかりません。

「調査の結果、予想通りでした」

よ、予想通り？

「古来から、あなたのような要素パターンを持つ女性は疫病神と呼ばれていました」

や…疫病神？

「過去にはそういう女性を利用していた例があります。

政略結婚に送れば、嫁いだ王朝が滅び、嫁いだ名家が廃れる。

荒ぶる魔神にささげれば、その魔力を衰えさせ、あるいは滅ぼす。

生活していた街が焼ける…という、まさに運の悪い例もあったようです」

理科室の背中が震えている…いや、笑っている？

「わ、わたしが、それだったの？」

たしかに、演劇コンクールはわたしのせいだった。

他にも、いろいろ覚えがある。今日も朝から運が悪い。

転校してきた初日に、こんな目にあっているのは…確かに運が悪

いんだろう。

でも…

「いえ、あなたは、その上をゆく可能性を秘めています。
そのほくろが…一致するのですよ。民に不幸を振りまいた彼女達
と」

「え…だ、だれと…」

「たとえば、殷王朝を滅ぼした…いえ、そんな事はどうでもいいのです。」

今は身の回りに小さな不幸を呼ぶだけにすぎないのでしょう。
伝え聞くとところによれば…起爆スイッチは…絶望とか」

な、なにがなんだか、わけがわからないよ！

「あなたのお父様は、重要な契約書類を出勤中に紛失されました。
不幸な事にライバル会社の方に拾われ、この魔宮町に転勤させられました」

え。

「あなたのおばあさまは、散歩の帰り道、歩道橋で足を踏み外して、
頭を打ちました。」

その時の影響でしょうか…その晩でしたね？」

え、え？

「不幸な事に…亡くなられたのは？」

え、え、え？

なに？ なんなの：わたしのせいなの？ わたしが不幸をまいたの？

おばあちゃんは、わたしのせいで死んだの？

わたしが不幸の星の元に生まれたから？

わたしが：疫病神だから？

わたしが、わたしが、わたしが、わたしが、わたしが、わたしが……
わたしが！！

……………

全てが解った。

たしかに、わたしは支配者だ。

ほほ、全てがわかるし、全ての不幸の”つながり”がわかるぞ。

ほほ、力が湧いてくる。

遙かな古代より、疫病神と言われ、苛まれてきた我らの憎しみの
声が聞こえるぞ。

”全てを不幸にしろ”と。」

くく、わたしを戒めるこのロープ、邪魔だ。

「おお、成功した！」

ほほ、なんと。今まで、わたしは、この程度の物で動けなかった
のか。

心地よい。両足を踏み締めれば、この実験台も踏み抜けそうじゃ。
見下ろして人を見るのが、これほど気持ちいいとは。

「素晴らしい！ あなたから未知数の力があふれてくる！」

ん、理科室か。

…くだらぬ。そんな輩だったか。

「ふふ、喜んでいるな？ たかが理科室が」

くく、喜びが消えたぞ。ほお、一瞬だったか、呆然としたのは。

「屈辱か？ ほお、両手が震えておるな？

よくぞ、よくぞ、わたしを解放してくれた。

お礼に、理科室、貴様の過去も口にしてやろう。

見えるぞ…ほほ、空間を越える実験を装置の完成を前にくしゃみをし、

ケールをつなぎ違えたのじゃな？

くく、その後の事までわかるぞ？

作動しなくなった機械を前にして、理化学の神を呪ったのだろうか？

その結果が、時空間をさまよう神の罰か！ 不幸じゃな！」

ふふ、白衣が震えておる。プライドが傷ついたか？

「…あなたは支配者ではあるが、敵でもあるようだ」

くく、ミサイルか。

理科室の白衣の中で閃光が走る。同時に吹き飛び、理科室の黒板へ。

ほお、受け身を取ったか。

「残念じゃな、そのミサイルは不良品だったようだぞ？ 不幸にも」

さらに、不幸は続くぞ。

理科室が立ち上がる。さすがに、それほど傷ついてもおらぬよう

じゃが――

「くく、貴様の髪の毛。黒板の隙間に挟まったようじゃなあ、不幸にも」

愉快。中腰のまま、わたしを見ておる。冷静を装っているが、動けない。

わたしは、これより世界を不幸にするのだ。

見える。ほほ、この魔宮町というのは、素晴らしい町じゃ。

地下に眠る”魔宮沼”が無尽蔵の霊気と妖気を放っているわけか。それが町に住む民に影響し……おお、いるいる。魔人とも言える輩が。

そうか、昼の犬狼という輩は……狼憑きか。

このパン屋の娘は……生後三年で……おお、姿は15、6じゃな。

町はずれに……なんでも屋の……霧沢神人？　む……

どうやら、そう簡単にはいかんらしいが……残らず不幸にしてくれる。

おお、見えるぞ。日本の断層が。

おお、見えるぞ。アステロイドベルトの小惑星が。

おお、見えるぞ。宇宙をただようミニ・ブラックホールが。

おお、見えるぞ。反物質宇宙が。

理科室の扉を開けるぞ。まっておれ、世界よ。ん？

「……あなたを解放したのは好奇心でしたが、それなりに考えていました」

ジャングル。湿気の高い空気と、重苦しい動物の声が入ってくる。

「わが”さまよえる理科室”が、別世界に移動する時を狙って解放したのです。

次にあの”魔宮町”に戻るのは…この時間で300年後です」

ふん、道連れが欲しかったのか。

「くだらぬ」

わたしは不幸の支配者であるぞ。

「なんと!？」

くく、扉の向こうが廊下になった。むろん、「魔宮高校」のな。

「理科室、不幸な事に、戻ってしまったらしいぞ?」

「いかん!」

くく、ここを出れば、理科室はまた、さまよう。不幸にもな。

「秋子や」

ん? 聞き慣れた声。

振り返ると…おばあちゃんか。

幽霊らしく、半透明だ。心配そうな顔をしているな。

「おばあちゃん、大丈夫だよ。わたしは強くなった。これ以上ないくらいに」

そう、今まではわたしが不幸だった。

不幸だったから、みんなに村八分にされた。

不幸だったから、おばあちゃんに心配かけた。

これからは違う。
これからは、みんな一緒に不幸になってもらうんだ。
ん？

「バカ野郎が！」

おばあちゃんの後ろに：強い：赤い光。
赤いルビーのペンダントが輝いている。

見える。おばあちゃんと同じような、半透明の幽霊が、幽霊達が
ルビーの光に
集まってゆく。そして、徐々に：少年の形になっていく。

：無法文太か。

「不幸だと？ 支配者だと？」

赤い光が少年に：無法文太になった時、おばあちゃんがニコリと
笑った。

そして、無法文太の体に吸い込まれていった。

「あなたは、あなたはわたしの孫ですよ。新田秋子なのよ」

無法文太の声が変わった：おばあちゃんだ：。

「言ったでしょ？ お前には、いつもおばあちゃんがついてるか
ら安心おしって」

おばあちゃんの声と同時に、無法くんの姿が消えた。

：！ 後ろか。速い。扉が閉められた。

「おお、無法くん。復活したのですか！」

「うるせー、理科室！ 後で折檻してやる！」

：おばあちゃんじゃない。無法くん：無法文太だ。
振り向いたわたしの：制服の腕をつかむ。
ふん。

「どわっ？」

甘い。実態化しているのなら：足払いだ。

不幸だけど、わたしは柔道をやっているのよ。

倒れた無法文太の：学生服の襟をつかみ、床に押し付ける。

これが霊物質？ 本物の学生服だ。

ふん、小学2年生の姿で高校生ってわけか。

なるほど、どおりで”かわいい顔”をしているわけだ。眉毛は太いけど。

「ふん、無法くん。頼まれたって？ わたしを守るように？」

小学生の顔に口付けした。ファーストキスだが、もうどうでもいい。

「守る必要なんてないでしょ？ ふふ、あなたは不幸な人だから：なんなら、

わたしが守ってあげるわよ」

ふふ、もう、全てがわたしの物。

「どう？ おチビさん」

「チビって言うな」

そんな怒った顔してもダメ。ふふ、キスってなかなかいいものだわ。もう一度。

ん、なに？

「秋子や、柔道を教えたのは誰だい？」

無法くんの顔がおばあちゃん？

うぐ、この締技：服の襟で締める技はおばあちゃんの…。気が遠くなる…。

「不幸なんて、彼がいれば乗り越えられるわ：秋子」

おばあちゃん…。

「おい、大丈夫か？」

ん…あ…。

「ここ、どこ…？」

「新田さん、大丈夫？」

「新田、大丈夫か？」

ん…気持ち悪い…クラクラする。

「おい、いいかげん起きろ」

ん、ん？

教室？ 無法…無法くんがわたしをのぞき込んでいる。

ん？ いや、寝ているわたしを心配そうに…クラスメイトのみんな！

「あれ…わたし？」

無法くんが手を貸してくれて、体を起こした。

「心配したぜ！ 新田」

「よかったね、新田さん」

みんな。どうして…どうなってるの？

「おい、みんなに感謝しろよ。みんなの靈気を分けてもらったから、あのタイミング

で復活できたんだぜ」

無法くん…そうか…。

「夢じゃないんだ…」

「そうですね。かなり貴重な体験をさせてもらいましたよ」
ん？ この声は！

「り、理科室！ あんた、なんでここに！？」

みんなの後ろに白衣が！ あれ、髪の毛が短い…。

「安心しな、俺がバツとして断髪してやった」

「黒板に挟まって、どうしようもありませんでした。それと、ほくろ」

ん、首筋のほくろ？

「お詫びに”お肌ツルツル・キット”で消させてもらいました。も

う、不幸でもなく

なるかと…個人的に残念ではありますが」

「理科室！ てめえ、丸坊主にするぞ」

「これは怖い」

「はははは」

みんなが笑った。

ふふ、なんだ、理科室って、変な人。

……………

「無法くん…」

無法くんが振り向いた。

「ごめんなさい」

純粋な小学生みたいな…輝く笑顔。

「いいってことよ！ それよりだな…みんなが言いたいことがある
って」

「え…？」

クラスみんなが振り向いた。

「あらためて、新田秋子さん…このクラスへようこそ！」

拍手。拍手だわ。

目頭があつい…わたし、わたし…

「みんな…迷惑かけちゃってごめんね！ そして、これから、よろ
しくね！」

変な学校で、これからも変な事が起きそうだけど…みんなは最高
だわ！

「…あいさつはすんだな。さて、新田」

ん、理科室の横に四角い顔。

「問題の答え、どうした？」

ペヤング先生だ…。よかった、理科室が言ってた通り、生きてた
んだ。

「すいません、わかりません」

「そうか、では、明日までにこの問題を答えて提出。いいな？」

え、明日まで？　そ、そんな：

「先生、俺もわからないんだ。どうします？」
無法くん？

「当然、お前も明日まで、だ。新田と協力でもして提出しろ」
「げげっ！」

無法くんの顔が、一瞬、おばあちゃんの笑顔になった。

ありがとう、おばあちゃん。

わたし、がんばる！！

了

2000年3月15

日

第6話（後書き）

この話はこれで完結です。

一人称主人公が洗脳のような感じで敵になる展開を実験してみました。

成功とはいえませんが、いろいろ糧にはなったと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7260z/>

無法文太と少女 「支配者」

2011年12月27日01時45分発行